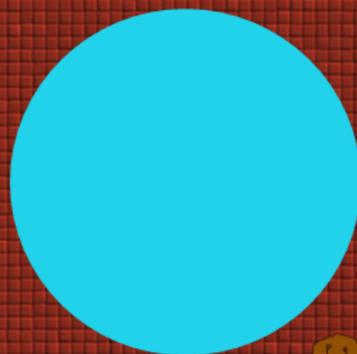
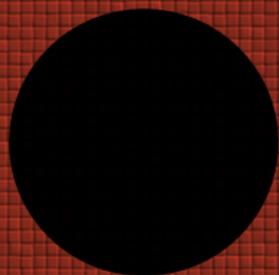


さして

重要でない

秘密



弦楽器イルカ



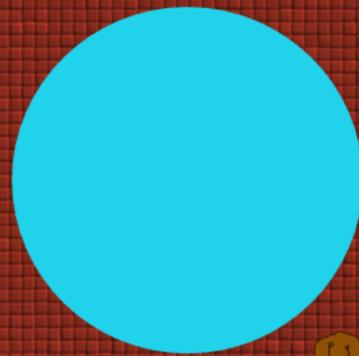
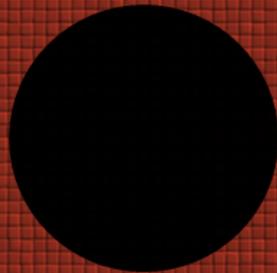
目次

奥付	19
----------	----

さして

重要でない

秘密



弦楽器イルカ



★

いつものように朝の通勤電車に乗り、空いている座席に座った。足元から噴き出す暖房が冬の冷気を混ぜ返し、湿りを帯びたむらのある空気が車内をクラゲのように泳いでいる。平日の混雑に比べ週末の土曜はだいぶ乗客も少なく、隣の客とは三人分くらいの余裕があった。向かいの席にも空席が目立つ。

座席の感覚を背中で確かめながらしばらく、腕組みして目を閉じていた。じんと、まぶたの裏側が重くなり落ちていくような浮遊感がある。そういえば昨夜は深夜2時過ぎ

に寝たのだろうか。と、発車を告げるアナウンスがあり、ドアの閉まる音が聞こえた。すぐに揺れる反動で、電車が走り出したのがわかった。

しばらく、そのまどろみに似た浮遊感を味わっていた。身体の内にある疲労が、目頭から体外へ放出されていくような感覚だ。二駅ほどして、車内の喧騒からだいぶ混み始めているらしいことに気づき、目を開けた。

開きざまに、強い光が眼球を射抜いた。思わずひるんだ薄目越しに、澄んだ大気の向こう、走る車窓の外から朝の光がビルの隙間を縫うように射しこんでくる。まぶたの裏側に真っ赤な暗闇を焼きつける逆光が、不意に子供のころ憧憬した夢のおぼろげな記憶を思い出させた。夕陽を浴びた校舎が黒い影となってたたずみ、小学校から帰宅する生徒たちの背をじっと見守っていた頃。もはや二十年以上も前のことだ。あの頃抱いていた夢は何度も泥にまみれ洗濯を繰り返し、そして今のしわくちな自分自身になった。こうとしか生きられなかった。だが、これでよかったのか。

漠然と答えの出ぬ問いをぶら下げたまま、次の停車駅で乗り換えねばならなかった。停車を告げるアナウンスで、徐々に乗客が席を立ちはじめ。私も足に力を込めようとして、ふと呼吸の中に、微妙に異質な粉のようなものが紛れ混んだ気がした。

なんだろう。肩をひそめ、意識の底を探る。これは前にもかいたことがある、私が私でいられなくなるような、匂いではなく、そう……

不意にその視線が、車内の人波に決して紛れることのない硬度を持ち、はっきりと私にこう伝えている。「アタシを連れて行ってほしいの」



ミヤコは、「アタシを連れて行ってほしいの」と言った。

破綻しているという自覚がある。話がつながっていない。私は会社へ行こうとして電車に乗っている。乗り換えるために席を立とうとしている。そこに、誰かをどこかへ連れて行こうなどというつながりは無い。どういう意味だ？

向かい側のドアの前に、金髪のショート・ヘアーで赤いワンピースのドレスを着た細身の女の子がじっと立っていた。歳の頃は十代後半だろうか。幾度も染色しているためか、髪がパサパサと乾いたように広がっている。肩の出たきれいな光沢のドレスだが、あちこちでしわが寄り、心なしかバランスが整っていない。それは、高いヒールのやはり赤いパンプスが大腿で開き加減なため、まるで男の子がはじめて女装したように、奇妙でぎこちない印象を与えるせいかもしれない。

だがもちろん、彼女のバランスを決定的に崩している原因はもっと別な場所にある。彼女には顔がない。いや、顔の全体が白いウルウルとした部分と、その中心に丸く黒い部分で構成されている。つまりそれは目だ。顔全体が巨大な目になっている。

その目が、細かく振動する動きで、私に言葉を押し付けようとしている。何層もの雲をまとった惑星に似て、水の膜が目の表面を幾重にも包み波を作る。水面が揺れる加減で、黒目と白目が混じり合いばやける。

「ミヤコは、連れて行ってほしいの」「ミヤコは、本当はキョウコって名前でもね、この前タツヤが新しい名前をそれがミヤコなの」「アタシは、新しい名前をママが付けたキョ

ウコじゃなくて。だからうれしかったタツヤが」

ミヤコの顔には目しかないが、感覚として、彼女の目が私に恐怖を与えようとするのを感じる。彼女がミヤコだと私は気づく。感覚として、アタシの目がアナタに恐怖を与えようとするのを感じる。

いや、違う、私が見るんだ。何かがおかしいことに気づいている。

私は、ミヤコの目が持つ強力な磁場のようなものに感応し、それに引きずり込まれている。死後まで意識を保つには、強い念と、それを維持するための生け贄が必要なのだ。私は見ないようにするが、ミヤコの目が私の意識を侵食し増殖している。ママは貧しい人で、ミヤコはママが嫌いなのだ。私は自分が今どこにいるのか確認しようとする。いつの間にか、私はどこかの部屋にいることに気づく。

きれいに整頓された広い部屋だ。赤い絨毯が敷かれている。白い簡素なダブルベットが大きな窓の手前に配置されている。中央にガラスでできたテーブル。壁際に洋服棚。生活が感じられないのは、業者が毎日清掃に訪れるような部屋だからかもしれない。

ミヤコは、18歳の誕生日の3週間前に、タツヤと出会って付き合い始めた。ブランドのバッグとかネックレスをもらえるのがうれしかった。でもママに付き合いをやめろって、何度もケンカした。ママはパパに捨てられてアタシを一人で育てたせいで、昔はきれいだったのに、生活に疲れていた。汚いママをアタシは憎んだ。

アタシはタツヤに呼び出されて、仕事に誘われた。最近、新しい仕事を始めたんだ。酒を出す店なんだが、働いたら他の人の倍、お金を出すよって。アタシは、タツヤを信じてみようと思った。お店では、きれいなドレスを着て、おじさんたちにお酒を注いで、話を聞いた。それはとても、いい仕事だった。みんなに、ミヤちゃんはこの仕事に向いているといわれた。アタシは、うれしかった。名前を変えて、きれいなドレスを着て、おめかしして、きれいな自分はきれいで自信があった。それはいい自分だった。

私は焦りを感じない。

それはまるで水の流れのように自然で、抗う力を無言のうちに排除し、矯正していく。

私は、ミヤコに喰われようとしているからだ。

ミヤコはいい自分だった。だから、タツヤに頼まれてホテルに行った。知らないおじさんだけど、話をするだけだと言われた。その人は太ってはげていた。でも、アタシはいい自分だったから、大丈夫だと思った。その人は私に乱暴しなかった。ただ、タツヤは借金がたくさんあるから、アタシはオレに買われたんだと言った。オレがオマエを買った。アタシはその人に買われた。タツヤが売った。タツヤがアタシを売って、アタシはその人に売られた。アタシは抵抗しなかった。それがタツヤのためだったから。アタシは、いろいろされたけど、その間ずっと、タツヤに売られたアタシはいい自分かどうか考えていた。アタシは帰る部屋を与えられて、そこに一人でいて、そこにいろんな人が来て、でもアタシは、じっと見ていた。ただ塊になって、じっと見ていた。そして、それだけをずっと考えた。

私はそこで、アタシは、ただ、怖かった。アタシは、ただ、キョウコじゃなくてミヤコになりたかった。きれいないい自分は、誰にもバカにされなかった。ヤスヨミみたいに、小学校のとき赤いランドセルでみんなでアタシを殴ってママの悪口を言ったヤスヨミた

いに、アタシはいつだって悪いことなんか。いや、私は、だが、逃げ出すワケにはいかないのだ。

私は、キミに喰われるわけにはいかないとミヤコに言った。私には、会いたい人がいて、帰る家がある。

嘘だ、とミヤコは言う。おまえはもう死んでる。

死、という単語に私は混乱する。鼻腔からするりともぐりこんだ不安が血流に乗り、脳から内蔵に至る全身の細胞を、恐怖という体液で満たそうとする。世界からとりどりの色が、まるで海が凍るように失せていく。死んだ？

そして彼女の、サヤコのことを思い出す。

あの部屋でまだ静かな寝息を立てている彼女の、今朝も撫でた髪や、頬の柔らかくて温かい感触を、まだ全身が覚えている。

会いたいんだ、と私は答える。だが答えた瞬間、私は理解する。私は死んだのだ。それは水を飲むように、事実として私の内側に滑り込む。

会ってどうする、とミヤコは言う。おまえはもう死んでる。

その通りだった。だが、会いたかった。ただ会いたいんだと私は答える。

アタシは、悪い自分だったのかとミヤコは尋ねる。アタシは、ママにずっと、悪いことをしてきたのだろうか。

私は、そうではないと答える。キミは逃げ場所を見つけられなかったただけだ、と。ミヤコは、アタシもママに会いたかったと言う。彼女の目を覆っていた水の波が形を変える。黒目が輪郭を失い、まるで逆再生するように目と鼻と口が整えられる。切れ長の目が特徴的な、頬の赤い幼さの残る本物の顔だ。ミヤコはずっと、小さい頃から何も見ないようにしてきた。パパがママを殴って出て行った。それは仕方のないことだから、アタシは絶対見なかったから。ただアタシは、ママに会って謝りたかった。アタシはお母さんにひどいことをした。

そのとき彼女は、学校の制服を着て、学生カバンを下げ、電車内に立つ普通の高校生だ。その年頃の少女が当然持つであろう希望や憧れで、瞳が潤いと光に満ちている。だが次の瞬間、その笑顔は泣き顔に変わる。

お母さん、ごめんね。アタシはあの部屋から逃げ出して、お母さんに会いたかった。でも乗り換えの電車をホームで待っているうちに、アタシは怖くなって、お母さんに怒られるのが怖くて、誰にも、本当のアタシが言えない気がして、アタシは、乗り換えるはずの電車で、飛び込んだ。

私は、その瞬間ミヤコの目に映ったものを見ている。彼女は線路に倒れこむように飛び込んでいく。左目の端に電車のヘッドライトが目映いほど光り、眼前では砂利に敷かれたレールが急角度で迫ってくる。

ミヤコが振り返った運転席では、母親が、無表情で電車を運転している。ミヤコはそっと、「ごめんなさい」とつぶやく。電車と衝突した瞬間。

そこは、小さな狭い部屋になる。母親が、ミヤコを抱いている。父親は隣に座りミヤコの頭を撫でている。ミヤコは三歳くらいの幼女で、眠い目を瞬かせて母親にしがみついている。部屋は乱雑に散らかっているが、遮るもののない昼の光がすべてを黄色く染め上げ、幸福が沈黙のまま、すべてをまどろみの中へ押しとどめている。母親が、「キョウ

コ」とつぶやく。その名がもう一度、幼女の心に刻まれ、小さいキョウコはそっと、目を閉じる。何かが始まる前に、世界が眠りにつく。

そして、私は車内に立っている。



呆然と立ち尽くす私の脇を、通勤者たちがせわしなく行き交う。次になすべきことを考えているが、なぜ私が死んだのか思い出すことができない。

だがほんの数時間前まで、少なくとも今日の明け方、家を出るときまでは、私は確実に生きていたはずだ。そこにサヤコがいたからだ。

サヤコ。それは私にとって未来を連想させるすべての物事と常に共にあるものだ。どこにも、彼女以上の本当はない。強烈に会いたかった。その想いの前では、ここにいる自分が何者かという疑問は意味をなさない。

私は、閉まりかけるドアを意味より先にすり抜け、ホームへ飛び出した。



サヤコさんに紹介された小さいフランス料理店でデザートを食べ終わり、向かい合わせに座りながら、彼女がプリント用紙から目を上げて言った。

「うん。よくわからない。けど、なんかよかったと思う」

中学生の息子が始めたロックバンドのライブ演奏を聴いた、母親みたいな感想だった。

「そうですか。すいません、変なの読ませて」

「全然。それより、続きはどうなるの？」

「いや、どうもならないですよ」

「え？」

短く発せられたサヤコさんの疑問が、手元のワイングラスへ迷い込みぐるぐる旋回し、ついに赤い液体と混じり合い音もなく溶けていく。

そんな僕の回りくどい妄想につき合わされて、彼女は少し怒っているようにも見えた。アルコールのせいかもしれない。そこで僕はわざと話題の転換を試みる。

「いや、いろいろ考えたんですけどね。ところで、次回の教室の課題、推理作家のじゃないですか。サヤコさん、推理小説って読みますか？」

「推理小説？ 子供の頃はまあ読んでたかな」

「僕も小学生の頃はよく読んでました。でも、だんだん読まなくなって。なんでだと思えますか？」

「そういえばなんでだろうね。...たぶん、あたしはもっと自分の生活に近いもの、女性として共感できるとか、そういう話が読みたくて、推理を楽しむってことをあんまり読書の目的としなくなったのかな」

「そうですか。僕はとにかく文章そのものを武器とする小説が好きなので、逆に物語の筋が武器で、文章は他人に筋を伝える手段って小説には、どうも食指が伸びなくなりまし

た。推理小説の謎は解決しても、僕の人生の謎は一切解決されない、という読書体験に白けた部分があるのかもしれない」

「うん」

「もちろん真に優れた小説なら、ジャンルに関係なく現実の謎を解き明かす手掛かりになると思うんですが。わざわざそこで推理小説を選ぶ理由がないんでしょうね。意外な真犯人に驚くよりも、現実を超えるリアルな描写や、正面しかないと思っていた風景を別の角度から見せられる衝撃に打ちのめされたい。あくまで趣味だと思うんですが、自分がそうだってことに気づいたんです。だから、もう書けないんです」

「え？」

「つまりこの物語もここから先は、自分にとって推理小説と同じなんです。いろんな幽霊と遭遇して、乗り越えて、最後に彼女と会って真相が明かされるってストーリーに、書く前からまず自分が飽きちゃってるんです」

サヤコさんがずっと何かを考えているような顔で沈黙している。

「もちろん僕にそもそも書く力量がない、ってのが事実だと思います。ただ、自分が書きたいのはそもそも謎なんてない、ただどうしようもない現実がずっと続いていく、そういう小説です。これ書いてから気づきましたが」

「一つ聞いていい？ すごく大事なこと」

そこで彼女は急に右手の人差指を顔の前に立てた。何か親密な儀式でも行われるかのようなしぐさと、今まであえて気付かないフリをしてきたその頬の赤さや膨らみに僕は数秒、目を奪われる。

「……はい」

「前に言ってたじゃない。書くのはもう諦めたって。これももう諦めたの？」

「そうですね。諦めて、もう瓶詰めして海へでも流そうかって気持ちでしたね。何の瓶に詰めるか迷ってたおかげで、今サヤコさんの目の前にかろうじて打ち上げられた、って」

「くどいね、表現が」

「すみません」

「なんて。冗談。あたしも人のこと言えないし。僕はこの文章を、シャルル・ドマーニュ地方で手摘みされたネッピソーレ種のブドウを100%使った1973年物の赤ワインの、いまだ芳醇な残り香が漂う空き瓶に詰めるか、それとも近所の酒屋の激安自販機で売っている50円ソーダのペットボトルに詰めるかで迷っていた。こんなくだけただけで文学になるじゃない」

「ならないですよ。しかもそれ思いっきり適当でしょ。シャルル・ドマーニュ地方って世界地図のどのへんですか？」

「知らない。地中海あたりでしょ。でも地中海がどこかまでは聞かないで。あたしの世界地図はもうだいぶアルコールでひたひたにボヤけちゃってるから。マッチで炙り出さないと読めないの、昔ミカン汁でやった冬休みの宿題みたいに」

「サヤコさん、お言葉を返すようですが最近じゃ、マッチも見かけないしミカンで炙り出しもあんま聞かないですよ。それこそ僕のエモンカケ発言、バカにしてる場合じゃないでしょ」

「レディーに対して失礼なこと言うね。でもエモンカケは言わない。ハンガーでしょ、そこはさすがに」

話がいつも通り、どうでもいい方向へ逸れていく。だがそれが楽しくて彼女と飲んでいるのだ。「今は忘れてしまったたくさんのお話をした」。サヤコさんと別れるとき、いつもこの歌詞が頭をよぎる。

「トオルくん。バカ話もいいんだけど、一つだけ忠告させて」

「なんですか？」

「急がないで、先回りしないで。遠回りしても、出口はあるから。あたしが今まで少なからず絵に触れてきた経験から言わせてもらえば、途中で迷っても、諦めなければ出口は必ずある。それがどんな出口かは、描き終わるまでわからないかもしれないけどね」



僕とサヤコさんは、ある作家が主催する一風変わった教室で知り合った。

その作家の作品を僕は読んだことがなかったのだが、月に一度開かれる教室では、作家が選んだ小説のラストを自分たちで書き替える、という講座のようなものが開かれていた。参加条件はパソコンのメールを使えることだけだったが、もともとは作家とその友人らの遊びとして始まった会なので、決してひらかれた会ではなかった。出席した人が友人を紹介することもできたが、作家が作成した小論文テストのようなものをパスする必要があった。

また、一回の出席人数は10名限定で、作家から送られてくる次回開催日時とテーマの詳細を記載したメールに返信した、先着10名のみがその会に出席できる仕組みだった。参加費は一回3000円で、作家と馴染みのある喫茶店を毎回お昼に貸し切って行われ、会の後でランチとコーヒーが出る。総武線沿線にある、駅から歩いて10分前後の小さな喫茶店で、会費は全額、喫茶店の収入になるらしかった。会に出席できない人でも、ラストを考えて作家にメールを送り、気に入られれば読み上げられることもあった。

当然、その会に参加するからにはまずテーマの本を読み、そのラストを自分なりに書き替える必要がある。ただし書く形式は自由で、人によっては文体を真似てそのまま書き替える者もいれば、こういう流れで、と箇条書きで書いてくる者もいた。また、参加者のアイデアは作家がその後自由に使ってよい、それを了承するのがこの会の一番の特徴だった。

僕は大学時代からの付き合いで、今は出版社に勤めている友人から、「先生が今、異業種で面白いヤツいないかって探してて、お前変わってるからな」と声をかけられた。

友人は僕が趣味で書くあれこれを昔から快く読んで、批評をくれる一人だった。学生時代、彼が書いた非常に面白いコントに僕が脚色して共作したこともあった。面白そうな話なので早速、作家あてにメールを送ってみると、作家本人から直接返信が来た。簡単な挨拶の後で、「三題話を四百字以内で書くこと。文体や形式、お題の順番や使い方は自由」という指示があった。

そして肝心の三つのお題は、「マッチ」「野村」「もう一度、マッチ」だった。期限は一

週間だった。

非常に高度な要求だと思った。だいぶ変わった作家なのかもしれない。お題はその都度違うようで、友人の時は「キツネ」「タヌキ」「銀河系」というお題だったと言っていた。

仕事をしながら一週間、頭を悩ませ続けた。食品メーカーの営業でスーパーやドラッグ・ストアを回っていたが、逆に仕事の効率は少し上がった気もした。得意先では真面目な営業マンで通してきたので、陳列棚の相談を受けながら頭では大喜利みたいな文章を考えていることがちょっとした秘密のような、良い刺激になっていた。

三日目に下書きを書きあげ、六日目まで推敲した。推敲に丸三日間かける、というのはどこかで読んだやり方で、自分もそれをできる限り踏襲していた。六日目から七日目に切り替わる深夜0時過ぎに作家へ返信した。六日目と七日目を間違えて数えていないか不安なので、早めに送っておきたかったのだ。

返信があったのは八日目の朝だった。何度も開くのをためらい、昼過ぎにやっとメールをクリックすると、喜んで教室の仲間に迎えたいと書かれていた。

ちなみに、僕が書いたのはこんな内容だった。

「

『もう一度、マッチと呼ばれたい』

ショッピング・モール内にある本屋の前を何気なく通り抜けようとして、その帯に目が止まった。最近、本の帯に対して非常に懐疑的な僕は（煽り文句の派手さばかりを競い合い、内容に対する吟味は二の次という気さえする）、何がどうなってるんだ、と叫び出したい衝動に駆られた。

呼ばれてんじゃん、全盛期を知らないジュニア達からも。それとも「さん」づけがお気に召さないの？ マッチさんの「さん」を取れってこと？

そう思い題名に目をやる。『自伝 野村義夫』

呼ばれてないよね。お前は一度も。大体トシちゃんの立場は？ ビッグと呼ばれるのはナシ？

手にとっちゃダメだ。負けて気がする。

だが、何か引っかかる。ん、本物の義夫は夫じゃない、男だ。あ、これもしかして日本でマッチを初めて作った人とか？ そりゃ紛らわしいね！

しかし後にわかったことだが、それはただのマッチそっくりさんの闘病記だった。余計紛らわしい。

」（400文字）

正直、これで受かるとは思っていなかった。ただ、これだけ面白いお題に対して笑いを求めても罰は当たるまい、という開き直りはあった。また、これを書く前に読むべきと思い、先生の本を買った。自分が好きなタイプの小説だったので、受かって素直にうれしかった。



サヤコさんとは半年前、三度目の参加になる教室で席が隣になり、ボールペンを貸したのがきっかけで仲良くなった。そのボールペンは自社製品のサービス品で、レトルト食品のミニチュア模型が付いていた。得意先の女性に評判が良いので、「よかったらあげます」と言ってみたところ、御礼をするしないの話になり、彼女が「それならこの前、教室の帰りに小さな創作フレンチの店を見つけたので、そこへ行ってみたい。それが御礼になるかわからないが」と冗談っぽく提案された。

自分に自信がなければ、そんな誘いはしないだろう。だがもし断られれば、その自信も少なからず揺らぐはずだ。つまり、「あなたが断れば私の自信は揺らぎますが、どうしますか？」と弱みをみせているのだと感じた。20代後半の僕は、自分がこれまでも同じような女性の弱さに何度か惹かれ、その度に轢き殺された苦い経験を思い出した。

用事がある、と断ることも出来た。ただ、その誘いに応じたい理由が実はもう一つあった。帰り道に発生する小さな気まずさが気になっていたのだ。

教室の中ではそれなりに意見を交わしていたメンバーが、終われば各自それぞれが特に申し合わせることもなく、最寄り駅へ歩いて向かうことになる。中には自転車で帰ったり、駅のそばでショッピングをするという人もいたが、駅までの10数分間の、顔見知りなのに知らないそぶりというか、たまに路地でもう一度会ったりしてお辞儀すべきかどうか迷う、あの情けないほど小さい気まずさが実は相当苦手だったのだ。

正直、途中にあるスーパーのトイレで30分くらい便座に腰かけていようかと真剣に悩んだりしていたので、二人という単位で帰れる口実はありがたい事この上なかった。

だが公平に言って、今となってそんな口実はただの言い訳と認めざるを得ない。初めての教室で彼女を見かけた時から、僕は惹かれていたのだ。2度目のとき彼女は出席しておらず、あまつさえ自分の文章がたまたまちょっと評価されたこともあり、せっかくの良いカッコを見せられない落胆でそのうれしさが若干湿ったのも否定できない。

それ以降すでに三回ほど、夕方までの時間をぶらぶらと過ごし、(はじめはどうなることかと心配したが) カジュアルでも入れる気さくなフランス料理屋に来た後、やはりその近くのカフェ・バーへ寄ってカクテルやデザートを頼んでいる。更に2か月くらい前からは、休日都合がつけば、東京タワーや鎌倉など何となく気になった場所へ二人で出かけたりした。

サヤコさんは僕より二つ年上だが、仕事を辞め今は大学の編入生をしている。昔、美術大学に通っていたが改めてもう一度、絵に関する勉強をし直したい、という理由を聞いていた。この教室は以前の会社の知り合いから勧められたらしい。

カフェ・バーでケーキとコーヒーを食べながら、サヤコさんが言った。

「トオルくん、今日やった課題はどうだった？」

「あのダックスフントの？」

「そうそう、ワープするヤツ」

「サヤコさんが書いたの、僕もよかったと思いました。羨ましかったですよ」

「まぐれよ。こんなの初めてだし。当たり所の良い思いつきみたいな感じじゃない？」

前日までにメールで送られたものをすべて印刷し、そこから先生が気になったものを取

り上げる。自分の原稿は自分で、その場には先生が音読することになっていた。

「トオルくんはあの本、前に読んだことあるって言ってたけど、いつ頃？」

「たぶん学生の頃ですね。サヤコさんは？」

「あたしは初めてだったんだけどね。そもそもどう思った？」

「まあ、今日先生が私見を述べた通りですよ。自閉的で聡明な少女を主人公が創作したダックスフントの寓話によって外の世界へと導く、その展開が非常に面白かったです。

ただ、僕も少女を死なすのはあんまりなんじゃないかと思いました。単にバッド・エンドが嫌なんじゃなくて。あの死は結局、少女自身のためでなく主人公のために捧げられたような気がしますし。

これから少女が外の世界と繋がることで、初めて味わう挫折の苦しみや乗り越える喜びを、あっさり奪わなくてもいいんじゃないかと。だったらもっとずっと長く、少女が老婆になって死ぬまでの苦勞を書いた方がいいんじゃないかと思って、僕はアレを書きました。

でも、創作というものが持つ可能性、つまり全くのフィクションだって人に生きる希望や可能性を植え付けることができる、そういう示唆に富んだ良い作品だとは思いますが」

サヤコさんは飽きるそぶりもなく、真剣に僕の目を覗きこんでいる。この人はもしかして、人の目を覗きこむことで何かエネルギーでも吸収してるんじゃないだろうか。こちらがうろたえるくらい、決して目を逸らさない。

「それであんなに長く書いたのね。先生びっくりしてたじゃない。いまだかつてA4で30ページも書き替えた人はいなかったって。なるほど。

でもあたしは耽美的な話が嫌いじゃないから、まあアリかなって素直に思ったな。ただ、どうせなら少女の死に対する感情をもっと描いてほしかった。岡崎京子の『ピンク』とか、山田詠美の『姫君』なら、突然の死を納得できる雰囲気はもう少しあるんだけど、あの少女は死ぬにはちょっと無垢すぎるのかもね。

だからあたしは感情の爆発っていうか、『羊をめぐる冒険』で主人公が羊男の前でギターを叩き割っちゃう感じ。あれがほしかったのよ」

確かに彼女が書き替えたラストは、「少女が死んだ後に、主人公は頭の中で棒っ切れを引き抜いて、それをダックスフントの頭に叩きつけて殺す」という容赦のないものだった。その後、「こんなものに何の意味があるのだと叫び、もらったウイスキーの瓶で自身の象徴である鏡を割り、その中味をすべて流しに捨てながら涙を流す」。

そして、先生はサヤコさんの話を今回の大賞に選んだ。毎回、「独断と偏見」と前置きして大賞を一つ決めるルールだった。「非常に豪快で物語を吹き飛ばす迫力がある」と先生は絶賛していた。僕も彼女の結末を悪くないと感じ、誇らしくも羨ましい気持ちになった。

「サヤコさんが書いたの、僕は小学校の時に国語で読んだ、蝶を潰す小説を思い出しました」

「あ、『少年の日の思い出』ね、ヘルマン・ヘッセの。あれはあたし、結構意識した」

「すごいな。以心伝心ですね。ツーカーじゃないですか」

「そうね。もう付き合ったらよかったのにね」

その上目がちに企んだような笑みは、僕が動揺するのを知っているのだ。

彼女には、遠距離で付き合っている彼氏がいる。何度か別れたりヨリを戻したりを繰り返しているらしい。専業主婦を望む彼氏に対して、「外の世界を失いたくない」と彼女は主張していた。三十歳を目前にして結婚の理想と現実揺れる気持ちがあるのだろう。

だが、それがいったいどんな気持ちなのか、はっきり踏み込んで聞くことはできなかった。この関係の最終的な判断は僕ではなく、彼女にあると思っていた。そしてそんな僕だからこそ、彼女は会って話したがるということも知っていた。僕はこの曖昧な関係を手放したくなかった。それでも.....

「付き合えないんですか？」

アルコールのせいにして、いつもより一歩先へ踏み込んだ気がした。彼女がほんのりと赤い頬で僕を見る。その大きな瞳が、またまっすぐに僕を見つめている。

やはりダメだ。目を逸らす。

「なんで目を逸らすの？」

「.....それ、癖ですか？」

「何が？」

「いや、何でもないです」

「今すぐじゃないと、ダメ？」

「ダメって、いや。どういう意味ですか？」

「.....うまくいかないかもしれない」

「彼氏と？」

「うん。わかんないけど」

それを聞いた心が、可能性を求めて甘い展開を望む。まるで、小さなひびを押し広げようとダムへ流れ込む水のような。

「いつ、わかりますか？」

「.....いつかな」

そう言って彼女は言葉を濁し、僕の指に視線を移した。伏し目がちなその瞳の引力は絶大だと思う。思考さえも吸い寄せられ、次の言葉が出ない。

「でもわかったら言うよ、トオルくんには必ず...怒ってる？」

「いや、怒ってないですよ全然。無理を言ってるのは僕だと思うし」

「無理じゃないよ。ありがとう、その、好きだって言ってくれて。うれしかった」

少し前、僕がそう告白した後、彼女から初めて彼氏の話聞いたのだ。

「もうちょっと、待っててくれる？」

「もちろん」

「ごめんね。本当に」

「謝らないでください。こっちがただ好きで待ってるだけですから」

「...そうだね、うん。モテる女は辛ってことね」

冗談めかしたその口調を、僕はわざと無視してコーヒーに手を伸ばした。

「なんで？」

「いや、なんでって言われても」

「反応なし？」

「いや、辛いだろうなって思いましたよ。さっきみたいにツーカーなら通じるかなって」

「無理。全然電波来なかった。やっぱり付き合えないね、あたしたち」

「あ、ホントすっごい辛いでしょう、モテ女って。罪深い自分を恨みますよねーきっと」

「そう、そうなの。よくわかるね。あたし、生まれたことが悲劇だったのよ」

僕はこの楽しくも歯がゆい時間を確認するように、自分のミル・クレープをフォークでゆっくりと裁断した。

「また無視？」

「いやいや。悲劇です」

「もう、嫌なヤツ」

彼女はムスツとした口調で言う。

「それ、マジでちょっとへこみます」

「ホント？ 冗談だよ。面白い人だよ、トオルくんは。あたしが言うのもなんだけど。初めての教室から、ちょっと気になってた。あのとき課題が何だったか忘れちゃったけど、トオルくん思いつきり笑かしに来てたじゃない。ガムテでハンドル付けるとか書いてて、アレ吹き出したよ。トオルくん、見た目がすごい真面目メガネの人って印象だから、余計。たぶんみんなもそう思ったと思うよ」

「そうですか？ いやうれしいですけど、でも僕は湯本さんとか、ああいう人が面白いと思いますけど。見た目もオシャレで個性的だし」

僕は太い黒ぶち眼鏡をした湯本さんの顔を思い出す。

「そうかな。これはあたしの趣味だと思うんだけどね、あの人ちょっと自尊心高そう、それにそもそも出版業界の人だし。プライドがお洒落メガネかけちゃってる感じがする。あ、言い過ぎてる？ お酒のせいよきっと。でもあたし、こういうことばっか言ってるから嫌われるんだろうね」

「いや、そんなことないですよ」

むしろ僕は、と続く言葉をさりげなく飲み込めただろうか。酔いの醒めかけた顔が再度、少し赤くなるのを感じる。

「なんか赤いね。酔ってる？」

「そうですね。少し酔ったかな。あ、もちろん、お酒にも。サヤコさんにも」

「うん。で、大丈夫？ 帰れそう？」

「大丈夫です。それに帰れないって言っても、帰るしかないし」

「そう。...家、行ってもいいよ？」

僕は驚いて正気に戻る。

「え？ いや、いいですよ。なんでですか？」

「いや、帰れるか心配だから。でも、やっぱり迷惑かな」

「迷惑じゃないですよ。でも、それまじいでしょ」

「何が？」

「何がって……」

なんと返せばいいんだろう。だってわかるでしょ？ と心の中で呟いてみる。からかってます？ 冗談ですまなくてもいいんですか？ 想像の中で彼女は笑う。それってどういう意味？ 空想にそう問われて、更に言葉に詰まる。

あなたを襲うかもしれませんよ、と思いきって言う。でも彼女は少し考えてから、襲ってどうするの？ と子供のように聞き返すのだ。トオルくんはあたしをどうしたいの？

「……帰りましょう」

不自然な間に耐え切れず、思わず怒ったように切りだしてしまった。

「怒ったの？」

「いや、怒ってないですよ」

僕は彼女に、自分が童貞であることを明かしていない。だが彼女を見送った後、そんなことは軽く見透かされているんじゃないかと、いつも悩む。二十代後半でまだ童貞という事実は、水を抜かれた金魚のようにおそろしく息苦しいコンプレックスだ。それを「据え膳食わぬは男のロマン」という借り物の小さな誇りだけがかろうじて抑え込んでいる。

外はもう冬だとわかりきっていたのに、星も出ていない夜空に吐く息がやけに白く感じられた。振り返ると彼女も空を見上げながら、いつも通り僕の一メートルほど後ろを歩いている。その距離になぜか安心する自分がいて、その安心を腹立たしく思う自分もいる。

もどかしく、もがく。

二人一緒にバス停でバスを待つ間、彼女がうつむいて独り言のように呟く。

「さっきはごめんね。でも、うれしかったよ、本当に。あの小説、あたしの名前をああい風に使ってくれて。トオルくんの中にあたしの存在が残ってるって感じた。それは本当に素直にそう思う。それだけは、今日ちゃんと言っておきたかった」

「ありがとうございます。それは僕もうれしいです。さっきはすみませんでした。そんなつもりなかったのに。また、会いたいです。…あの、待ってます」

「ホント？ ありがとう。また会おうね。でも」

バスが入って来たせいでその後の言葉が聞き取れなかった。

本当に、聞こえなかったのだ。



「今回取り上げた作品は、ネットの書評でもいろいろ評価が分かれていました。こんなに賛否両論があるのは、良い意味で話題性のある、非常に珍しい話と思って選びました。

バスの事故で娘をかばって死んだはずの妻が、その魂だけ娘に入れ替わって生き返ってしまう。同じような魂の入れ替わりを扱った話はたくさんあるのですが、たとえばマンガで大島弓子さんの『庭はみどり川はブルー』なんかは娘に妻の魂が入るという構造が同じですし、同じくよしもとよしとさんの『ツイステッド』も、徐々に魂が消えて

いく感じが似ていると個人的に感じました。

さて、今回の『独断と偏見』大賞を決める前に、恒例の私見を挟ませてもらいます。

この作品の評価がなぜ分かれるかといえば、今日はじめに申し上げた通り、『近親相姦』というテーマをはらんでいることが要因の一つです。娘に妻の魂が宿った時点で、父親と娘との間には恋愛感情はもちろん、過去の体験として二人で性行為をした記憶も残ることになる。たとえ肉体的には交わっていないにしても。そういう設定を筆者が選択した、ということです。通常、近親相姦を受け入れるにはかなりの違和感を伴います。そして、この関係をどう扱うかで結末は大きく変わると考えていました。

送られてきた結末を大きく二つに分けると、一つは、『母親の魂は消え娘の魂が残る』という、受け入れやすい結末。もう一つは、『娘の魂は消え母親の魂は残る』という受け入れにくい結末に分かれます。もう一つ、『どちらの魂も残る』という選択肢も、先ほどの湯本さんのようにあるにはあるワケですが、二つの魂が一つの体に残り続けるのは不自然なので、私も前者二つが妥当だろうと思います。

そしてどちらにせよ、この近親相姦のジレンマを少しでも回避すべく、皆さん苦慮されたように思いました。違いますか？

さて、受け入れにくい『母親の魂が残る』方の結末では、先ほどのサヤコさんのように、『娘＝妻が独身を貫き、父親の結婚を見守る』といった結末が、二つありました。その中でもサヤコさんは、娘＝妻が指輪を夫に渡し、『新しい奥さんに渡してほしい、そしてそれを私たちだけの秘密にしてほしい』。それに対して夫も、『いや、これはキミに持ってほしい、来世で巡り会うための秘密にしよう』と、非常に美しい結末を付けてくれました。サヤコさんご本人は先程、『こういうのがみんな好きだと思って皮肉を込めて書きました』なんてご謙遜を言われてましたが、あ、謙遜じゃないですか？ でも私はその結末も良いと思います。

ただ、今回の『独断と偏見』大賞は、ナカヤマトルさんの文章にしたいと思います。

ナカヤマさんの文章は、いつも笑いがあって私は好きなのですが、今回は結構真面目に書いてくれました。あ、これは褒め言葉ですよ、ふてくされないでね。

ナカヤマさんは受け入れやすい方の結末、つまり『娘の魂が残る』方を選びました。今回、こちらの結末を書かれた方が圧倒的に多かったのですが、その中でもナカヤマさんは、できる限り原文の世界観を壊さないように努力されていると感じました。ナカヤマさんの結末を読んで、私もやはり近親相姦を完全に回避するために妻の魂は消えるべきだ、と考えました。よって、大賞はナカヤマさんにしたいと思います。おめでとうございます。

それではナカヤマさん、一言挨拶と音読をお願いします」

「はい。ナカヤマです。すみません、今回は真面目なものを書いてしまって。でも次回からはなんとか笑いをねじ込みますので、今後ともよろしくお願いします。それでは、音読します」



設定：

妻の魂が徐々に消えていき、娘の魂が残る。最後、娘の結婚式で、父親に向かって手紙を読み上げるシーンを追加する。以下は、その手紙文の内容である。

「お父さん。

お父さんへの手紙を読む前に、どうしても、あたしからみなさんに告白したいことがあります。お父さん、あたしがこれから言うことを、決して止めないでください。

みなさん、あたしには、今まで誰にも言えなかった、二つの秘密があります。信じてもらえないかもしれませんが、聞いてください。

ひとつは、あのバスの事故であたしはお母さんを亡くしましたが、実はお母さんの魂は亡くなっていませんでした。信じてもらえなくても仕方ありませんが、お母さんの魂はあたしの身体を生かすために、この身体に宿っていたのです。これは今まで、お父さんとあたしだけの秘密でした。でも、もうお母さんはここにはいません。あたしの魂が生き返ったのと引き替えに、お母さんの魂は徐々に消えていきました。お母さんはあの事故のときもあたしをかばって犠牲になりましたが、もう一度お母さんはあたしのためにその命を捧げてくれたのです。

もう一つの秘密は、お父さん、あの最期の日に、お母さんからことづかったことです。

あたしが生き返った後しばらく、この身体にはお母さんとあたし、二つの魂が共生していました。でもそれはすごく不自然なことでした。いずれどちらか一人は消えるだろう、もしあたしが消えてもお母さんを恨むまい、そもそもお母さんに救われた命だから、そう思っていました。そしてそれはお母さんも同じ思いだったと、お母さんが消える、いえ、もう一度亡くなる前日にわかりました。あの最期の日、あたしとお母さんは眠りについた夢の中で初めて会い、話をしたのです。

お母さんはその夢の中で、『お母さんがお父さんをいつまでも愛していることを、魂が重なり合った娘のあなたにも忘れないでほしい。だから、あの結婚指輪は形を変えずと付けていてほしい』と言いました。どうして形を変えるのか、あたしは聞きました。するとお母さんから、『もしも指輪を見たら、お父さんが誤解してしまうかもしれない。まだお母さんの魂が残ってるんじゃないかって。それで心を痛めてほしくない。もうお父さんとはお別れをしたから、これ以上お父さんを悲しませないように、この会話も内緒にしてほしい』と言われました。

お父さん、お母さんは本当に、お父さんを愛していました。そしてあたしもお母さんと同じくらいの愛情を持って、この人と一緒に生きていきます。その思いで、今あたしはこの指輪を受け継ぎます。

お父さん、お母さん、本当に迷惑をかけてごめんなさい。今まで育ててくれて、本当に、ありがとうございました」

そしてラスト、父親は新郎に向かって二回殴らせてほしいと言い、新郎も泣きながら

それを受け入れるのだった。

.....これでどうですか？



その夜サヤコさんといつものフランス料理店でお互いの健闘を讃え合った後、彼女は僕に、彼氏と婚約したことを打ち明けた。もう来月には大学も卒業なので新しい家へ引っ越すことに決めており、この教室も今日が最後、と彼女は言った。

「そうですか」

「うん」

急な話で、それだけ言うのが精いっぱいだった。

「ごめんね、急で。昨日、彼と電話で決めたの。でも、トオルくんにはちゃんと報告しようって決めてたから」

「いえ、ありがとうございます」

彼女の明るさが、僕にお礼を言わせたいように思えたのだ。

「ホントごめん。でもなんか、ちょうどキリがいい回だったね。最後のトオルくんの結末もよかったし。あたしもあれなら大賞あげるよ」

「いや、あれもたまたまですよ。サヤコさんこそ、よかったですよ」

「褒め合うね、お互い。これが最後かと思うと余計、かな」

「.....ですね」

彼女の残念そうな、でも決して嫌ではなさそうな笑顔に、僕は吞まれたように何も言い返すことができなかった。

「トオルくんの書いた結末のせいかな。正直、婚約して本当によかったのか後悔する気持ちもあったんだけどね。でも、今は素直に幸せになれるんじゃないかって気がする。こう言っちゃなんだけど、ありがとうね」

「いや、何もしてないです。っていうか、それは逆に複雑ですよ」

「やっぱ、イヤ？」

「イヤっていうか。とりあえず家帰ったら真っ先に今日の課題の本、破り捨てようって思いますけどね。...イヤだからかな」

「相変わらず面白いね。ところで今日の本はどう思った？」

彼女の質問が頭に入るのに、だいぶ時間がかかった。

「え、今日の本ですか?...ん、正直言って僕には合わないと思いました。前にも言いましたけど、文章を武器にする小説ではないなって。申し訳ないけど、読んでてちょっとしんどかったです」

「ね、あたしも。すごく一生懸命書かれてるって思うけど、読めば読むほど、これが売れまくる世間に対してすごく違和感を感じた。まあ、世の中そんなことばかりだけどね」

いつもならここで彼女と悪態三昧になってもおかしくなかったが、思考が全く別のところでストップしていて動かなかった。彼女もそれ以上、乗ってこなかった。

「やっぱ怒ってる？」

「怒ってないです。それは仕方ないことだし。ただ、ちょっと」

「うん？」

「今日、潰れてもいいですか？」

勢い良く手元の赤ワインをぐっと口元へ持ち上げる途中、自分が酷評してきた安い物語のワンシーンみたいに思えて、可笑しくなって戻した。

「え、飲まないの？」

彼女も可笑しそうに笑った。僕も笑い出すと止まらなくなり、二人共しばらく笑い続けた。

「いや、飲みますよ」

それからグイッとグラスを空けると、待っていたように彼女が言った。

「いいよ。送ってあげるから」

僕は決してアルコールに強いタイプではない。これを2、3杯続けたらべろべろに酔っばらうだろう。

「本当に送ってもらいますよ」

「うん」

「...いや、やめときます」

彼女はまた笑い、だがすぐに真剣な表情でこう切り出した。

「ねえ、あたしね、一つ、いえ、二つね。トオルくんに言いたいことあるの。忠告ね。一つはね、この前の話、必ず終わりを付けて。あたしの名前を使ったんだから、ちゃんと納得できる結末にして。いい？」

「わかりました」

僕は頷くしかなかった。

「もう一つはね。トオルくんがあたしにとって退屈しない人だってこと、これ本当にすごいことだから覚えておいてね。でも、あなたが何を抱えているのか、あたしは最後までわからなかった」

そこで沈黙があった。彼女は窓の外へ一瞬、視線を外した。正確には視線の先にたまたま窓があった、というような外し方だった。僕と彼女の間にある壁について、それがなぜ生まれたのか、ふっと思いがよぎった。

「あたしは卑怯者だし、そのことでは逃げも隠れもしないつもり。だからこれは今後のあなたの恋愛のために言っておくわ。

今後は、あたしみたいな女と深刻につき合わない方がいいわよ。時間の無駄だから。

ただあたしは、あなたに対しては彼よりもずっと本音をさらけ出したつもりよ、時間も忘れるくらい。それこそ、彼とあなたの魂がうまいこと混ざったりしないもんかって、ちょっと本気で思ったんだから」

その言葉は、随分後まで僕の心に残った。彼女の顔を忘れ、声を忘れ、交わした会話や笑いあった冗談を忘れた後も、その言葉だけが耳の奥で何度も反響し、こだまのように僕の心をノックし続けた。

その冬が終わり、サヤコさんと会わなくなって半年が経過する頃、サヤコさんの注文通り僕は自分の小説に終わりを付けた。結末自体は非常に短いものだったが、自分が納

得するまで何度も何度も書き直しを繰り返した。サヤコさんの言う「ちゃんと納得できる結末」になったかどうかは、読ませる機会がないためわからなかった。友人に見せたところ、「俺にはよくわからないから、先生に見せてみたら」と言われた。まだそこまでの勇気はなく、書いた動機や長さからいっても違う気がしたので、「これは痴情のもつれで書いた個人的な文章だから、また書いてそれが気に入ったらトライしてみる」と答えた。

何度読み返しても、これがいったいどの程度の文章なのか、自分には判断がつかなかった。こうとしか書けないが、それでベストと言えるのだろうか。それでも書き終わってから、彼女が言ったことの意味が少しはわかった気がした。

恥ずかしい話だが、僕は自分が童貞であることをとても後ろめたく思っていた。更にそのうえ多くのコンプレックスを抱え、その狭い柵の中で自分のことにばかり気を取られていた。その間ずっと、誰にも手を差し伸べて来なかったのだ。

これが出口だとは思えない。たとえ出られたとして、それがまた新しい入り口となり、更なる出口を探す道程を歩むことにもなるのだ。それでも僕は早く次へ歩み出したいと願い、もどかしさに今ももがき続けている。



ホームへ飛び出すと、そこはもう駅ではなかった。

目の前には見慣れたドアがある。それは私の家だった。数年前に購入した中古の一軒家で、若干古びたドアの錆びも、玄関までの石畳の欠け具合も、表札の丸文字さえも何一つ変わっていない。

拍子抜けするほど平穏な懐かしさに呆然とする意識を振り払い、私は急いでドアノブに手をかける。鍵のことを忘れていたがドアはすんなりと開き、玄関にサヤコが立っていた。

いつもとなんら変わっていないそのエプロン姿に、腰から碎け落ちそうな安堵を感じた。二人とも見つめ合いながら、言葉を発することができない。ただ、私はなんとか彼女に近づき、その体をゆっくりきつく抱きしめた。

彼女は震えていた。泣いているのだ。

「どうなっているのかわからない」

私がある場で言える精一杯だった。他に言うべき言葉が見当たらない。

「サヤコも、死んだのか？」

「私たちみんな、死んだんだと思う」

サヤコは小さく、振り絞るような声で言った。

「なぜ？」

「わからない。でも、そうだと思う。違う？」

「いや、たぶん、そうなんだろう」

「ねえ、あたしたちはこれからどうすればいいの。死んでしまっ、でもここにいる」

本当にどうすればいいのだろう。私にも見当がつかない。強がりも吐けない。だが、一つだけわかっていることがある。

「サヤコ。私はここにいる。そしてキミも。これが死後の世界だとしても、私にはこれ以上望むものはない」

生も死も関係ないのだ。いつか死ぬ、その限りある命を、私はサヤコと共に過ごす時間に費やす。自分たちがどんな世界にしようとも、それ以上はないのだ。

「こうなってから、何度も強く思い返してるんだ。本当にキミを取ると決断したら、何が何でも取りに行く。そう約束したこと」

「うん」

「だからここがどこだろうと、私はキミと一秒でも長くいられるよう祈る。そして、そのために生きる」

「ありがとう。あたしもあなたと、一緒にいたい」

それは決まりきった言葉だった。はじめからわかっていた。だが、私はその言葉を待っていたのだ。そのために戻ってきたのだと気づく。たとえばはじめからわかっていたようとも、陳腐な絵空事と誰に笑われようとも、私は本当に、彼女の口からその言葉を聞いたかったのだ。

☆

奥付

さして重要でない秘密

<https://puboo.jp/book/18353>

著者：弦楽器イルカ

著者プロフィール：<https://puboo.jp/users/gengakkiiruka/profile>

感想はこちらのコメントへ

<https://puboo.jp/book/18353>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/18353>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<https://puboo.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ

さして重要でない秘密

版番号の予定

{{-
-}}

著 者 書籍情報の編集ページから、著者情報を入力してください

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
